

Title	Arthur王の死 : ldylls of the King 考
Author(s)	服部, 慶子
Citation	Osaka Literary Review. 25 P.29-P.43
Issue Date	1986-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25529">https://doi.org/10.18910/25529</a>
DOI	10.18910/25529
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Arthur 王の死 — *Idylls of the King* 考

服 部 慶 子

*Idylls of the King* は、中世以来ヨーロッパで語り継がれてきた Arthur 王伝説を基に構成された Tennyson 独特の Arthur 王物語集である。その大体の筋書は幼時に読んで深く感銘を受けた Malory の *Le Morte d'Arthur* のものと似ているが、人物像、エピソード、物語の配列の順番の大幅な違いが随所で見られる。そうした違いは、Tennyson の言葉を使うなら、“the fashion of the day” に則して行なわれた操作から出てきている。その為に中世的な芳香を台無しにしたという Arnord の手厳しい非難を受けることにもなった。それ程までに異色な Arthur 王物語とはどんなものであるのかを、本稿では Arthur 王の死に関する問題を中心に、主に Malory 版と比較しながら論じたい。

## I

*Idylls of the King* は、制作年代の順序は異なるが、“The Coming of Arthur” に始まり、“The Passing of Arthur” で終わる12の物語よりなり、Arthur 王の誕生から死までを描いた物語集である。“The Passing of Arthur” (1870) は、最初 “Morte d' Arthur” (1842) という題名で発表されたものに行数を増やすなどの修正を加えたものである。また “The Coming of Arthur” (1870) の題名も “Birth of Arthur” にする予定だったのを改めたもので、誕生、死という言葉は排除し、登場と退場に見立てようとする意図がうかがえる。

Malory 版と比べてみると、Malory は Uther 王が Arthur をもうけるところから物語を始めているが、“The Coming of Arthur” は、Uther 亡き後即位した Arthur の父親が誰かを Guinevere の父 Leodogran 王が疑

う場面から始まる。Arthurの出生は曖昧で、Uther王の子であるかどうか疑わしい。騎士 Bedivere により Malory 版に類似する Arthur の誕生の経緯が語られるが、疑いは晴れない。続いて Leodogran は Arthur の異父姉 Bellicent に Arthur と本当に姉弟なのかと尋ねるが、“These be secret things.”と答えられ確信は得られない。次に、魔術師 Merlin の師 Bleyss が死の直前に Bellicent に語った話を聞く。それによると Arthur は父 Uther が死亡した夜に誕生し、その時、空から船が降りてきて消え、海は炎に包まれたという。その中から現われた Arthur を Merlin が引きとって育てたというのだ。しかし、彼女が Merlin にその真偽を確かめようとした時、Merlin は次の言葉で終る謎の文句で彼女を煙に巻く。

“Sun, rain, and sun! and where is he who knows?

From the great deep to the great deep he goes.”

(“The Coming of Arthur,” ll. 409-410)

このように、Malory 版と違って、Arthur の誕生は事実として明示されておらず、二重の聞き伝えの形をとっており、語り手自身も確信を持ってないでいる。王冠をつけた Arthur が天にいる夢を見て、やっと納得した Leodogran は娘 Guinevere と Arthur の結婚を許す。

Arthur の死も誕生と同様に神秘的である。“The Passing of Arthur” は、妻や Modred の裏切りによって荒廃した Camelot の様子を Arthur が嘆くところから始まる。最後の戦いの前夜、Gawain の幽霊が Arthur の夢枕に立って彼の死を予告し、“there is an isle of rest for thee.” (“The Passing of Arthur,” l. 35) と告げる。翌日の Modred 軍との戦いは霧に覆われた混乱の中で行なわれる。最後に一騎討で Modred を倒して致命傷を負った Arthur を Bedivere は荒地の中の礼拝堂へ運ぶ。自分の死を悟った Arthur は Bedivere に Excalibur を湖に返させる。その後、瀕死の Arthur は水際まで運ばれてゆき、湖で待つ婦人達が乗った船に迎えられ、Avilion の島で傷を直すと言い残して去ってゆく。

この湖での奇跡的な場面は Malory 版を踏襲しているが、Malory によ

れば、Arthurを見送った後、夜が明けてから礼拝堂を訪れた Bedivere は新しく作られたばかりの墓を目にする。誰が埋葬されたのかと脇に平伏す隠者に尋ねると、夜中に婦人達が死体を運びこみ、埋葬を頼んだという。Arthurの死体に違いないと悟った Bedivere は、そこに留まり供養する決心をする。この箇所に関しては、Malory 自身の意見が挟まれている。

Malory は、それ以上 Arthur の死については知らず、墓に埋葬されたのが Arthur であるかは定かではないが、ともかく Arthur は船に乗って湖に運ばれたと語り、続いて次のような意見を述べる。

Yet some men say in many parts of England that King Arthur is not dead, but had by the will of Our Lord Jesus into another place; and men say that he shall come again, and he shall win the holy cross. I will not say it shall be so, but rather I will say, here in this world he changed his life. But many men say that there is written upon his tomb this verse : HIC IACET ARTHURUS, REX QUONDAM REXQUE FUTURUS.<sup>1)</sup>

Arthur の復活が墓に刻まれ、王の再来を人々は信じているが、Malory は疑問を抱いている。

Malory 以前の Arthur 王物語を参照すると、19世紀まで歴史物語として信じられていた Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* (1136) や Layamon の *Brut* (1190) の中では、Arthur は傷の治療の為に Avilion の島に旅立ったとされている。また頭韻詩 *Morte Arthure* (1360) には、Arthur は Glastonbury に埋葬されたと書かれている。史実によると、7～8世紀頃には Arthur 王の復活信仰が既にあり、「最後の審判の日まで Arthur の墓は隠されている」又は「Arthur の墓については永遠の謎なり」という墓碑詩が残されている。<sup>2)</sup>

さらに1190年には、Glastonburyで Arthur 王の墓の発見騒動があった<sup>3)</sup> 棺には「ArthurがAvilionの島に眠る」と書いてあったという。Glastonbury という土地は昔は沼沢地に囲まれた島のように見え、林檎が特産品で

あったことから “Inis Avallon” (林檎の島) と呼ばれていた。また Glas はガラスを意味し、Wales 伝説における黄泉の国がガラスの島であることから Arthur 王の墓がある場所としてふさわしかった。ただ、この発見騒動は僧侶の捏造だという説もあり、その真偽は定かでない。

従って、Avilion の島に旅立ったという Arthur の埋葬、墓の有無に関しては意見が割れており、Malory はどちらとも決めかねたようである。Tennyson も Arthur の墓については、“...his grave should be a mystery/ From all men, like his birth.” (“Guinevere,” ll. 295-296) と謎めかしている。

ここで “The Passing of Arthur” に話を戻すと、別れ際に Arthur は若干の疑いを持ちながらも自分の行き先を次のように語る。

... “I am going a long way  
 .....  
 To the island-valley of Avilion;  
 Where falls not hail, or rain, or any snow,  
 Nor ever wind blows loudly; but it lies  
 Deep-meadowed, happy, fair with orchard lawns  
 And bowery hollows crowned with summer sea,  
 Where I will heal me of my grievous wound.”

(“The Passing of Arthur,” ll. 424 & 427-432)

Arthur の行く Avilion の島は常夏の楽園で、Celt 伝説に由来する楽園的彼岸のイメージに似ている。Celt 民族にとっての楽園は地上に位置する幸せな者の住む島で、その顕著な要素は、霧の彼方にあること、妖精女王の迎え、船旅、林檎の木、果実のなる森などで、<sup>4)</sup> Avilion の描写と共通している。また Avilion は中世人の夢見た Eden の園の要素も同時に備えている。この楽園は旅行者にとって到達可能な現実味を帯びた場所であって、海岸、山などによって人の世と隔絶されており、そこにある林檎の木の実で若さを取り戻せるという。<sup>5)</sup> Avilion はその名前から昔より地上の楽園と同一視されていたし、Tennyson の描く Avilion もそうであると考えられる。

Arthur を見送った Bedivere の脳裏に “From the great deep to the

great deep he goes.” (“The Passing of Arthur,” l. 445) という Merlin の言葉が蘇る。“great deep” はここでは Avilion を指していると考えられるが、上述のように、ここでの Avilion は黄泉の国というよりは地上の楽園の様相を呈している。not, nor を使った否定文型の連続は楽園描写の伝統的手法であるし、Arthur が湖に至るまでの道程も、霧に覆われた荒地を過ぎ、荒地と異界の地域の混合である荒廃した礼拝堂を通る。湖は断崖の下にあり、“juts of pointed rock” (l. 218) の上を降りねばならず、楽園への道りにふさわしい情景である。そして、楽園への旅物語に帰還がつきものであるように、Arthur の帰還も暗示されている。

また Arthur の墓については言及せず、Arthur の船出の場面で、この物語を終わらせていることから、死そのものを否定しようとする Tennyson の意図が窺える。Arthur を背負った Bedivere は墓地を通り抜けて (“And rising bore him through the place of tombs,” l. 343) 湖に向い、埋葬云々の話は省かれている。Merlin も、“... he will not die, / But pass, again to come.” (“The Coming of Arthur,” ll. 420-421) と断言しており、Arthur は傷を直す為に一時的に楽園へ去るだけで、また帰ってくるのである。キリスト教的霊魂不滅の思想に従えば、墓に埋葬されても復活の希望は残されている。救われる人には永遠の生命が与えられるから死は存在しないと見えよう。しかし、意識的に死や誕生という言葉を避け、墓を排除していることから、Tennyson は *Idylls of the King* においてキリスト教的な生と死を否定しているように感じられる。何故だろうか。

そもそも伝統的な Arthur 像にはキリスト教色が強い。Tennyson においても物語は異教徒に荒らされ野獣がはびこるところに Arthur が登場して異教徒を追い払うところから始まる。戦場には神の炎が降りて Arthur を護ると騎士達は言い、Guinevere との結婚式には以下のように歌う。

“The King will follow Christ, and we the King  
In whom high God hath breathed a secret thing.”

(“The Coming of Arthur.” ll. 499-500)

Arthur は天啓を受けて Christ に続き、教会での即位の時にも奇跡の光が降り注いだ。Lady of the Lake は異教徒退治の為に Excalibur を授け、Arthur も “our fair father Christ” の為に異教徒と戦うことが自分の使命だと感じている。このように Tennyson の Arthur も Christ に準ずる存在であって、それに対立する heathen という言葉が頻出する。Arthur の統治する Camelot はキリスト教の勝利の上に成立しているのである。ところが Christ の shrine で deathless love を誓った王妃 Guinevere が Lancelot と密通したことにより Camelot は衰退し、本来は宗教的な存在である聖杯<sup>6)</sup>の探求も Tennyson においては Camelot の没落に輪をかけるという否定的な意味が強い。

Tennyson の “The Holy Grail” (1869) では Arthur 不在の時に布に包まれた聖杯が Camelot に現われる。その時、帰途にあった Arthur は Camelot の上に雷のような光を見て、その崩壊を危惧する。騎士達は Arthur の制止もきかず、聖杯の正体を見ようと探求に出る。その中で敬虔な Percivale が Galahad と共に見た聖杯は荒地の丘の彼方にあった。そこで二人は嵐と雷に見舞われ、足元には次のような凄惨な光景が広がる。

Yea, rotten with a hundred years of death,  
Sprang into fire: and at the base we found  
On either hand, as far as eye could see,  
A great black swamp and of an evil smell,  
Part black, part whitened with the bones of men.

(“The Holy Grail,” ll. 496-500)

橋から橋へと渡って、その場所を通り抜けて海に漕ぎ出した Galahad の頭上に聖杯が正体を現わす。Percivale は “spiritual city” を垣間見るが一瞬後には全て消え失せる。<sup>7)</sup> 自分の見たのは幻想にすぎないのではと Percivale は最後まで疑いを抱き、Arthur の死後は修道院で隠遁生活を送る。

普通、聖杯物語では荒地は聖杯の存在する美しい城の外側の風景として対照的に使われる場合が多い。<sup>8)</sup> しかし Tennyson 版では “spiritual city”

は幻に過ぎず、地獄を思わせる荒地の様子が強調されている。不義の罪に苦しむ Lancelot は伝統的な描写による城<sup>9)</sup>の中で聖杯を見るが、聖杯はベールに包まれたままであった。結局 Tennyson においては聖杯は幻の域を出ず、理想を象徴するという神聖な意味も失なっている。帰還した Percivale を待っていたのは大風に破壊された Camelot であった。Tennyson は、“The Holy Grail”の最後の謎のような Arthur の言葉 (“In moments when he feels he cannot die, / And knows himself no vision to himself, Nor the high God a vision.” ll. 912-914)を、自分の神秘体験を踏まえて<sup>10)</sup>神を信じるのは理屈ではないと説明しているが、Arthur の言葉を Percivale は理解できず、己の見た vision を信ぜよという説得も役に立たない。

こうして信仰の衰退と Camelot の没落は並行し、“The Holy Grail”においては Christ の威光は効力を失ない、聖杯は荒地の中に現われる。異教徒側に寝返った Modred との戦いも混乱の中で展開し、“death white mist”が敵味方の境界を失なわせる。

... and shrieks

After the Christ, of those who falling down  
Looked up for heaven, and only saw the mist;  
And shouts of heathen and the traitor knights,  
Oath, insult, filth, and monstrous blasphemies.

(“The Passing of Arthur,” ll. 110-114)

Arthur の胸中も混乱をきたし、自己の存在が危うくなってくる。

“O Bedivere, for on my heart hath fallen  
Confusion, till I know not what I am,  
Nor whence I am, nor whether I be King,  
Behold, I seem but King among the dead.” (ll. 143-146)

生と死の境界も曖昧なこの状況のもとでキリスト教的な Arthur の復活を望むことは困難であると言えよう。Arthur が運びこまれた礼拝堂も内陣や十字架が壊れ荒廃している。そこで古代の英雄の眠る墓場を後にして Arthur



は湖の向うへと旅立ち、死ぬのではなく、別の世界に移動するということで帰還の可能性を残すのである。その際、現世と来世を厳然と隔てる墓の存在は邪魔である。Arthur は死ぬのではないから埋葬されてはならない。

そうしてキリスト教的な生と死から離脱した Arthur は “great deep” の世界へと去ってゆくが、その具体的な行先である Avilion は Arthur の墓があると伝説のいう Glastonbury ではなく彼方の楽園である。Bedivere の耳に Arthur を迎える街の音が微かに届き、期待を持たせるのである。

Then from the dawn it seemed there came, but faint  
As from beyond the limit of the world,  
Like the last echo born of a great cry,  
Sounds, as if some fair city were one voice  
Around a king returning from his wars. (ll. 457-461)

このようにして Arthur はこの地上にある楽園の島へと向うわけだが、ここでこの島と、Arthur 王物語にかかわりがあると考えられる “The Lady of Shalott” (1842) における島を比較してみたい。この作品には Lancelot が登場し、Malory の “the fair maid of Astolat” と呼ばれる Elaine の水葬との類似が見られ、*Idylls of the King* 中の “Lancelot and Elaine” (1859) と筋書が似ている。

Shalott は Camelot へ流れ込む川の上流にある島に独り住む。この島には花が咲き、周囲は壁に囲まれ、外界から隔絶されており、楽園的世界であると言える。Shalott の姿は外からは見えないが、外界とは川の流れを隔てただけの至近距離にある。また、川の上を船が Camelot へと往復し、外界の生活がすぐ側まで入りこんでいる。Camelot を直視してはならぬという呪いをかけられた Shalott は鏡を通して眺めた外界の風景を “magic web” に織りこむ。ある日、彼女が鏡に写った Lancelot の姿の輝きに魅せられて直接姿を見た結果呪いが降りかかる。そこで Shalott は白装束で船に身を横たえて Camelot に向って船出し、到着寸前に息絶える。呪いがこれまで彼女を現世から隔離していたが、タブーを破った彼女は自らを水

葬することで現世に到達する。Shalott の死は象徴的に種々に解釈されており、<sup>11)</sup> 死＝誕生だとする説もあるが、<sup>12)</sup> 彼女にとっては Camelot が the other world である。

Arthur の死と比べてみると、死を契機に Shalott は島から Camelot へ向けて、Arthur は Camelot から Avilion に向って船出する。勿論、Shalott の住む島と Avilion を同一視することはできないが、共に樂園的要素を持つ島であり、生と死の世界が同じ地上に存在するという点で、現世との位置関係も類似している。Camelot からの物理的距離に違いはあるが、両場所とも水によって現世と隔てられており、船葬がその越境を可能にする。

死後の船旅という思想は Egypt 時代からある。Celt 伝説でも死者の魂は幸福の島に行くと信じられ、丸木舟を用いた棺での実際の埋葬もあった。また、その真偽はともかく Arthur の墓が発見された時、船の形を思わせる「うつろな榎の木の中」に埋葬されていたという。<sup>13)</sup> こうして Arthur の死と船葬の習慣は密接に結びついているのだ。Shalott の船葬は方向が逆であるが、the other world への旅立ということでは Arthur の船出と共通している。彼女の水葬は Arthur の船出と逆の軌跡を描く同質の動きなのである。従って Shalott の島 対 Camelot = Avilion 対 Camelot という関係が考えられ、Shalott の島と Avilion がよく似た世界であり、Camelot は彼岸にも此岸にもなりえることから樂園の島と現世は変換可能とも言える同等の位置にあることがわかる。死によって樂園に移動しても、再びあちらの世界で死ぬことによって、現世への帰還が可能になるのだ。

## II

次に Arthur がそこから来て、また帰ってゆくという“great deep”について、さらに検討を加えたい。*Idylls of the King* の各物語は季節の推移に沿って配列されている。Arthur の誕生は元旦の夜で、Guinevere との結婚は春、聖杯探求は夏、“The Last Tournament” は秋と続き、最後の戦いは真冬に行なわれる。Arthur の旅立の直後に新年が訪れて暦が一巡する。

一年たって古い年が死に、新たな年の再生を繰り返す暦は循環している。Tennyson が Arthur 死後の Lancelot と Guinevere の経緯を省き、<sup>14)</sup> Arthur の死で、この物語集を完結させたところには一巡の意識が表われている。新年を迎えて暦が新しくなるように Arthur も新たな生を受けて、再生するように感じられる。

Arthur の出生についての Merlin の謎の言葉は、“Rain, rain, and sun! a rainbow in the sky!” (“The Coming of Arthur,” l. 402) で始まって sun と rain が繰り返されて “Rain, sun, and rain! and the free blossom blows.” (l. 405) と続き、“From the great deep to the great deep he goes.” (l. 410) で終る。Arthur は、雨が太陽によって水蒸気になり、虹となって、空に戻る自然現象の中の循環に喩えられている。雨は地上に降っても消え失せず、再び空に昇って再生するから Arthur も “... he will not die, / But pass, again to come.” (ll. 420-421) だと Merlin は断言する。さらに雨と太陽によって花が咲く自然現象も四季の循環に適っている。花は一旦枯れても翌年には新たな花をつけるからである。Arthur の幸福の絶頂であった Guinevere との結婚は5月の花盛に行われ (ll. 459-462)、最後の戦いの時は花も枯れる真冬である。しかし、年が明けて春の到来と共に再び花が咲くのと同様に Arthur にも新たな再生が予感できる。

また、王は太陽のイメジでよく表されるが、Arthur と太陽の関りに注目してみよう。Arthur の結婚式に騎士達は “... our Sun is mighty in his May! ... / our Sun is mightier day by day.” (ll. 496-497) と歌う。Arthur は日毎に輝きを増す太陽で、彼の鎧の胸当に嵌めこまれた宝石は太陽の光を集めて、彼が息する度に輝く (“Lancelot and Elaine,” ll. 292-295)。戦場での Arthur の雄姿を Lancelot は “Red as the rising sun with heathen blood.” (l. 307) と表現し、Guinevere は自分の不義の罪を棚に上げ “But who can gaze upon the Sun in heaven?” (l. 123) と欠点のない Arthur が眩しすぎることを非難する。やがて Arthur の治世に翳りが見え、最後に Arthur は Modred 軍を “sunset bound of Lyonesse” に追いつめる。戦

いは日没と共に終り、臨終となった Arthur の姿は埃に塗れ輝きを失なっている。

And all his greaves and cuisses dashed with drops  
Of onset; and the light and lustrous curls—  
That made his forehead like a rising sun  
High from the daïs-throne-were parched with dust.

(“The Passing of Arthur,” ll. 383-386)

そして Arthur は夜明に船出し、見送る Bedivere の頭上に朝日が登り、新年が到来する (“And the new sun rose bring the new year.” l. 469)。こうして Arthur の登場から退場までに太陽も一巡し、朝日が Arthur の再来を予告して *Idylls of the King* は終る。

このようにして *Idylls of the King* 全体が季節や太陽といった自然の循環に即しており、Arthur の誕生と死もその循環に組み込まれていることがわかる。Arthur は直線的時間を生きるのではなく、宇宙的植物的循環の中で回帰するのである。Tennyson は Arthur について以下のように語っている。

“Birth is a mystery and death is a mystery, and in the midst lies the tableland of life, and its struggles and performances. It is not the history of one man or of one generation but of a whole cycle of generations.”<sup>15)</sup>

上記のような世代の循環思想は Aristotle の言う種の存在の永遠性につながるものと考えられる。個は死んでも種として存続することが可能だからである。<sup>16)</sup> 回帰する Arthur もこうした genetic perpetuity の上へのかった不死性を獲得していると言えるだろう。birth と death が謎なのは、どちらも決定的な瞬間ではなく、死が新しい誕生につながり、始めでも終りでもないからである。季節の推移と物語の進行が一致し、Arthur の進退が太陽の動きに沿っていることも、こうした回帰思想を裏付けていると思われる。

このような意味での永遠性は聖書の言う永遠性とは異なっている。衆知のようにキリスト教的時間は genesis から Last Judgement に向って直線に進む一過性のもので、その後に永遠が広がる。聖書には、始めに無があり、そこから世界が生じたとある。一方 Aristotle は世界を始まりも終りもない永遠のものと考えた。この相反する2つの世界観は中世以来、神学者の間で論点となり、<sup>17)</sup>折衷案も出されたが *Idylls of the King* は Tennyson も言うようにヘブライ的な history ではなく、ギリシャ的な “cycle of generation” の物語である。こうした循環思想に基づく構成をとったところにもキリスト教的思想からの逸脱が見られる。

### III

これまで、Arthur の誕生と死について考察し、異教徒を排し Christ に準ずる者であったはずの Arthur が、キリスト教的な靈魂不滅を得て復活するのではなく、墓の存在しない、帰還可能な地上の楽園的島 Avilion へと船出したことを見てきた。B. Taylor は Arthur と Christ の関係について “By creating parallels between Arthur’s endeavours in this world and Christ’s, Tennyson revives our sense of the King’s mission and, therefore, of his success.”<sup>18)</sup> と述べ、Guinevere の不義の罪を許したことも Arthur の勝利であり、Arthur は死の直前に信仰を回復するとして Arthur とキリスト教の勝利でこの物語は終わっていると主張するが、私には Arthur はキリスト教的世界からどんどん離脱していったように思われる。墓は排除され、great deep から great deep へと循環する存在として描かれているからである。異教徒追放の使命を帯びて登場した Arthur の退場は皮肉にもキリスト教的ではない。埋葬されて復活の日を待つのではなく、旅人のように Camelot と楽園の島 Avilion を往復し、ギリシャの永遠性の中で再生を繰り返すのである。

ここで、友人の死を扱った *In Memoriam* (1850) における死生観に少し触れてみよう。この作品には、盟友 Arthur Hallam の死に直面した

Tennyson が信仰の危機に陥りながら最終的には信ずることに救いを見出し、信仰の勝利を歌うまでの内面の変化の経過が書かれている。ところが Hallam の死による失意のうちに、その名前 (Arthur) が同じことから Hallam の姿を重ねて、まず “Morte d’Arthur” を書き、その後、長年書き続けて完成した Arthur 王物語の中では信仰から離れる動きが感じられた。

この態度の違いの原因として、当時 Darwin によって巻き起された懐疑思想の影響が考えられるし、<sup>19)</sup> 社会的にも、ヒステリックに他者の死を嘆くロマン派の時代<sup>20)</sup> を過ぎ、死をタブー視し、忘却しようとする態度<sup>21)</sup>へと変化しつつあったことも挙げられよう。当時の画家が *In Memoriam* の挿絵として墓石にもたれて疑惑の眼で骸骨を眺める少女の姿に “Doubt: Can these dry bones live?” という題名をつけたり、<sup>22)</sup> 葬産業が資本主義と結びついて死体をもものとして扱うような風潮の中にあっては Tennyson も愛による信仰の勝利を歌えなくなったのかもしれない。

そういった社会的な背景に加えて、友人の死と、伝説の人物 Arthur の死という題材の違いによる理由が考えられる。N. Frye は日常経験における死と神話、伝説との違いについて以下のように述べている。

The feeling that death is inevitable comes to us from ordinary experience; the feeling that new life is inevitable comes to us from myth and fable.<sup>23)</sup>

Tennyson にとって Hallam の死は避け難い現実であり、その際、客死した友の遺骸を乗せた船が波にさらわれることなく無事に故国に戻ることを切望した。<sup>24)</sup> 事実 Hallam は大地に埋葬され、厳然と存在する友の墓を目の前にしては死は否定できず、信仰に頼って救われるしかなかった。一方 Arthur 王の伝説の世界では信仰を抜きにして死のない循環する生を描くことができたと言える。Arthur 王は死ぬことなく再生を繰り返しながら永遠に生き続けるのである。

## 註

- \* Tennyson の詩の引用は *The Poems of Tennyson* ed., C. Ricks (London : Longmans, Green and Co. Ltd., 1969) に拠る。
- 1) Thomas Malory, *Le Morte d'Arthur* (Harmondsworth : Penguin Books, 1969), Vol. II, p. 519.
  - 2) リチャード バーバー 『アーサー王—その歴史と伝説』高宮利行訳 (東京書籍, 1983), p. 85.
  - 3) バーバー 『アーサー王』, p. 88.
  - 4) H. R. パッチ 『異界』, 黒瀬保他訳 (三省堂, 1983), p. 34.
  - 5) パッチ 『異界』, p. 164.
  - 6) Celt 伝説による聖杯は食欲を満たすという原始的なものであったが、後にキリスト教と結びついて、最後の晩餐に使われたとか、Christ の脇腹から流れる血を受けたと言われるようになった。Malory は地上における努力によって得られる最高の名誉ある褒賞として聖杯を持ち出し、12世紀前後のキリスト教徒のいまだく騎士道精神の理想の象徴として描いたという。cf. 尾島庄太郎 『叙事詩の研究』 (北星堂, 1980).
  - 7) Malory 版では Galahad は尼僧の住む修道院で聖杯を見る。
  - 8) パッチ 『異界』, p. 305.
  - 9) その城は海を渡った所にあつて、岩の上に築かれ、階段を登らねばならない ("The Holy Grail," ll. 811-816).
  - 10) Hallam Tennyson, *Alfred Lord Tennyson : A Memoir by his Son* (New York : Greenwood Press, 1969), Vol. II, p.90で Tennyson は以下のように述べたとされている。"Yes, it is true that there are moments when the flesh is nothing to me, when I feel and know the flesh to be the vision, God and the Spiritual the only real and true."
  - 11) 例えば Tennyson は、愛の目ざめが彼女を現実世界へ連れてきたと注釈している。cf. H. Tennyson, *Memoir*, I. 117.
  - 12) W. D. Paden は生前の彼女を、この世に生まれる前の魂の状態として説明している。cf. W. D. Paden, "Tennyson in Egypt. A Study of the Imagery in his Earlier Work" (Lawrence, Kansas : University of Kansas Publications, *Humanistic studies*, No. 27, 1942).
  - 13) バーバー 『アーサー王』, p. 95.
  - 14) Malory は Lancelot の死で物語を終らせている。
  - 15) H. Tennyson, *Memoir*, II, 127.
  - 16) cf. Frank Kermode, *The Sense of an Ending* (London : Oxford University Press, 1966), pp. 73-74.

- 17) Kermode, *The Sense of an Ending*, p. 68.
- 18) B. Taylor and E. Brewer, *The Return of King Arthur* (Suffolk : Boydell & Brewer Ltd., 1983), p. 124.
- 19) 実際 Tennyson の後期の作品には信仰の危機と絶望を歌ったものも多い。例えば “Enock Arden” (1864) の主人公は熱心な祈りにも拘わらず神に裏切られるし, “Despair” (1881) では神に対する強い不信感が表われている。
- 20) cf. Philippe Aries, *Western Attitudes toward DEATH : From the Middle Ages to the Present* trans., P. M. Ranum (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1974), p. 67.
- 21) cf. 高山宏 「死の資本主義」, 『現代思想』第12巻10号 (1984), p. 183.
- 22) H. A. Bowler 作の絵。1855年に Royal Academy に出品された。ヴィクトリア朝中期の人々の表面的な自己満足の下に潜む信仰の危機を描いたと言われる。
- 23) Northrope Frye, *The Secular Scripture* (Massachusetts : Harvard University Press, 1976), p. 132.
- 24) *In Memoriam*, IX-X.